

作成日 令和元年 12月 20日

令和元年 JSCA会員研修  
「リバーカヤック研修 大歩危」 報告書

主管 有限会社カヌースクール九州  
開催日 令和元年 11月 26日（火）～27日（水）  
会場 徳島県 吉野川 大歩危  
講師 庵 経弘氏（H2Oアドベンチャー）  
サブスタッフ 平井 剛 西胤 正弘 嘉藤暖博 末永直樹  
参加者数 一般会員 9名 講師 1名 計 10名

■研修会 3つのゴール

1. 流れを使ったボートコントロールの基本を学ぶ
2. ダウンリバーにおけるグループレスキューの方法を学ぶ
3. ホワイトウォーターカヤックのさらなる魅力を発見する



## ■研修報告

### ●11月25日（月）

庵氏が、カヤックで2日間の研修予定コースを漕行し、下見を実施。サブスタッフ3名も陸上から現場を視察。平常水位より50センチ少ない状態であることを確認。天候の急変も予想されないため、翌日からの研修会実施を決定。

庵氏を通じて現地のアウトフィッター様のベースを宿泊場所として利用させていただく。夕刻、参加者全員が宿泊場所に集合。

### ●11月26日（火）

活動時間：午前 10:00～午後 15:00

活動コース：都築酒店前～観光船発着所 約 10キロ

研修初日は、庵氏に加えて、株式会社サンデープランニングの平井氏にリーダーをお願いし、チームを組み、大歩危に点在する瀬を安全に下るためのルート取りを中心に研修を行う。スタート直後は、フェリーグライド、エディキャッチ等を繰り返してトレーニングした。さらに、スカウティングが必要な瀬が現れると時間をかけて庵氏よりルート取りの方法を学ぶ。



(ルートファインディングの方法)

- ①カレントの入口と出口、カレント（本流）の位置を確認する。
- ②コース上のハザードを確認する。
- ③ハザードに対応しない行動をとると、そこで、どのようなリスクが発生するか想像する。
- ④コースを決め、各コースの目印（ランドマーク）を覚えておく
- ⑤コース上のどの位置で、どのタイミングで、パドルスキルを使い分けるかイメージトレーニングする。

※コースに入ったのちは、常に波やカレントを観察しながら、コースを俯瞰するイメージをもって、先読みしながら行動していく。

ポータージを選ぶことも、参加者各自に任された。参加者自らが、リスクを許容できる範囲にコントロールし、許容できないと判断した場合は速やかに回避行動を選ぶことが大切である。

初日は、参加者各自がイメージしたルート取りを維持できずその難しさに直面した。瀬の入口、わずか 30 センチのラインのずれが、ルート取り全体に影響し、その結果流れ振り回され、ルート取りそのものが意味をなさないものになってしまう。

吉野川の溪谷と美しい流れ、早瀬は白く泡立ち、瀬音を轟かせる。何度も水の壁を越えて、参加者全員が、ゴールにたどり着いたのは 15 時を回っていた。



●11月27日（水）

活動時間：午前 9:00～午後 13:00

活動コース：豊永～都築酒店前 約 4 キロ



研修 2 日目は、やや上流に位置する豊永駅付近で出艇準備を完了。ミーティングでは、昨日学んだダウンリバーの技術や判断力を各自が試してみることを確認。チーム編成やレスキュー体制を再度確認し、川下りを開始。

この日は、短時間の研修ではあったが、静水でできないパドルワークは流水でもできない。そんな当たり前のことをあらためて痛感した。

（静水でのボートコントロールトレーニングの重要性）

また、エディキャッチやフェリーグライド等の技術を確実に身につけることで、瀬の中にあられるハザードに対応し安全な川下りが可能となる。（ボートコントロール技術がリスクを許容範囲に抑え込み、リスクの低減対策につながる。）等、学びの多い研修となった。13:00 には上陸し、15:00 現地解散。全員無事に研修会を終了することができた。

■2日間の研修を通じて。

JSCA九州ブロックの研修であったが、中国、近畿、中部からの参加者を得て、四国の美しい自然の中で、学び多き研修を無事に終了することができた。



参加者の大半が、日ごろから海や池、緩やかな河川での体験ツアーを主に実施しており、今回 2 日間のダウンリバー研修を通じて、あらためて参加者各自の現場に必要なとされる技術や安全管理を強化するヒントに気付けたのではないかと思う。

吉野川・大歩危コースを研修の場として、私たちが安全かつ実りある研修へ導いていただいた庵氏、平井氏に心から感謝いたします。ありがとうございました。



報告者：(有) カヌースクール九州

西胤正弘